

■ 編集だより

編集後記

最近の若者に目立つ「集団対人恐怖」。皆で対人恐怖ごっこ。人前で「地（自分）」を出さない、出せない。格好良く目立つのは嫌、不細工なのも嫌で、いつのまにか彼らなりの「平均行動」をとる。同年代の集まりでの会話はといえば、最近のギャグでぼかし、「地」を隠し、自分を出さない。ちょっとした失敗で失意し、自分を全面否定し、自信欠乏。人前で過緊張し、悪循環に。ひどいと引き籠もる。

廊下の向こう側から3人の女学生が横一列、「ギャーギャー」、「ゲラゲラ」しながら迫ってくる。このままではこちらと正面衝突間違いなし。でも、よけない、よけない、通路をふさいだまま突進してくる。結局、こちらが立ち止まり、お嬢様がたのために道を空ける。彼女たち、反対方面から誰かが向かってきていることを全く認知していないのか、それも自分たちよりも随分年上の初老の男、患者さんかな、ひょっとしたらこの学校の職員、先生？などと、思いもつかない、考えない、浮かばない、のだろうか。さすれば「認知障害」か？ 否々、3人は十分に初老男を認知し、その恐怖対象を集団で否認しているのか、はたまた？ 時々「実験」（こちらも直進）すると、3回に1度は衝突する。

むしろ1対1のすれ違いでは、こちらを過度に認知する。表情硬く、「コンニチワ」なのか「オハヨウゴザイマス」なのか、まあ、おそらくはこちらへの挨拶を口走っているようでもあり、いないようでもある「口（くち）パクパク」（無声音）で通り過ぎる。視線も合わせず、時にはすれ違い直前に、逃げるようにスピードアップする。

非常勤講師で他大学を幾つか回っても同様。皆の前では、質問は先ず出ない。こちらの力量不足かと項垂れるが、講義後すぐに、教科書片手に必ず何人かやってくる。顔をこちらの顔前30cmまで近づけて質問する、時に20cm。おとととと、つい、後方にたじろがざるを得ない。近すぎるよ、不快、不気味、といったこちらの感情やそれがためのたじろぎ行動やその理由にさえも、どうも気づいてないようだ。コミュニケーション相手との「こころの距離」と「からだの距離」がアンバランス。これも認知の問題か？ 対人緊張を必死で防衛しようとした結果としての行動か？ いずれにせよ、相手との適切な「キョリ」もとれない。

これらの珍現象もどきに、毎日のように遭遇していても、こちらに耐性は生じないのである。決して、なんだかおかしいコミュニケーション、いったいどこがどのように歪んでいるのか、奇妙なのか、不自然なのか、一般世間の日常性から逸脱しているのか。自分ひとりの誤認であれば、大きく安堵し、無用な心配事として片づける。しかし事態はどうもそうではなさそうだし、深刻な状況のように思える。全国津々浦々の多数の初老の男達も、毎日感じ取り、不安を抱き、あるいは不快感を覚え、嘆息し、途方に暮れているのが実態ではないかと推測する。

「急告 医学生も危ない！ 精神科医のノート」と題して、こっそり拙書を世に出そうと、3年以上も前から有言実行を企図しているが、途中から筆が進まない。出版のねらいは「このままだと日本の医療が危ないぞ、なんとかしなくては」との思いからである。「危ない」と考える理由は、なにも医師不足や医療・教育システムの問題ではない。もっと底辺の、基本的な、人間同士の自然な付き合い方の歪みの部分である。医療は対人を旨とする生業である。このままでは10年先の病院には人間臭さが微塵もなくなり、医療訴訟は鰻登りのままであろう。自然で暖かいコミュニケーションの中でだけ、医療は展開されうる。精神医療はその中心にあると思う。医学教育以前の問題である。ここにきて、社会のあり方が問われている。

堀口 淳